

長田新におけるペスタロッチー理解

— 1920年代から1930年代までの時期を中心に —

鈴木 由美子

(2004年9月29日受理)

The understanding of Pestalozzi in Arata Osada

— Focusing on 1920's -1930's —

Yumiko Suzuki

The aim of this paper was to make clear the process of making “Osada Pedagogy”. The results of this paper were as follows. 1) Osada paid attention to laying the foundation of pedagogy as one of the sciences. 2) Osada understood by Pestalozzi's pedagogy he could distinguish pedagogical thoughts from another philosophical thoughts. 3) Osada understood two important points by Pestalozzi's pedagogy. One was the relationship between social and individual. Osada understood that we should construct pedagogy from individual, that was “to establish country by educated people (Kyouiku Rikkoku)”. And the other was the original method of understanding of educational activities, that was “to know essences by intuition (Honsitsu Cyokkan)”. These were one of the fundamental factors of “Osada Pedagogy”.

Key words : Pestalozzi, Arata Osada, pedagogy

キーワード：ペスタロッチー，長田新，教育学

問題設定

長田新（1887～1961）の教育学をめぐる評価は、今日においてもまだ難しいといえる。そうではあるが、明治以降における日本の教育史において、長田教育学¹⁾は、検討され評価されるに値するという点においては一致するであろう。本論では、長田教育学の形成²⁾にペスタロッチー(J.H. Pestalozzi, 1746-1827)の教育学が与えた影響について検討することを課題とする。長田は、1920年代から注目され、戦時中、戦後を通して日本の教育に少なからず影響を与えた人物であるにもかかわらず、その教育学の全体像はまだまだ解明されているとはいえない。外国の理論の輸入を主たる内容としつつ発展してきた教育学界において、日本人が日本人としての民族性を背負い、日本人としての歴史的課題に真摯に向き合いながら、理論構築をなしてきた長田教育学の検討は、私たち教育学者が今日向き合わねばならない重要な課題を提示するのではないだろうか。本研究はこうした問題関心を根底におき

ながら、長田教育学の全体像の解明をめざすものである。

長田教育学については、大正期の平和教育論をとりあげたもの³⁾、日本のペスタロッチー研究に果たした役割をとりあげたもの⁴⁾、戦後における長田の教育学説史に言及したもの⁵⁾、戦時下における教育理論のひとつとして批判的に検討したもの⁶⁾、基礎的錬成の観点から当時の他の錬成論との比較をおこなったもの⁷⁾、教育内容改革論に着目したもの⁸⁾、道徳の概念を中心としたもの⁹⁾など、多様な側面からの研究がおこなわれてきている。本研究もこうした多くの優れた研究成果に多くを負っている¹⁰⁾。ここで、長田教育学の根底に、ナトルプ(P. Natorp, 1854-1929)から吸収したペスタロッチー研究があることに着目したい。長田は1920年代初め、ナトルプの教育思想を研究し、そこからペスタロッチー教育学へと関心を移し、さらに教育学の学問としての基礎づけをねらった研究を進めている¹¹⁾。「独立の科学としての教育学」を基礎づけること¹²⁾が、長田の終生の課題のひとつだったと

いってもよいだろう。

そこで本論では、「独立の科学としての教育学」として長田が構想した教育学（長田教育学）の形成にペスタロッチー教育学が与えた影響について検討し、長田がペスタロッチーから何を学び、独自の教育学を構想していったかについて検討していくことにする。

本論では、長田が公刊した最初のペスタロッチーに関する研究書である『ペスタロッチーの教育思想』¹³⁾から、学位論文でありペスタロッチー教育学の体系化をねらった研究書である『ペスタロッチー教育学』¹⁴⁾までの時期を中心として、長田のペスタロッチー研究の発展を追うことによって、長田教育学の形成へのペスタロッチー教育学の影響をとらえていくことを課題とする。

1. 長田新とペスタロッチーの出会い

まず、長田とペスタロッチーとの出会いについてであるが、大別すると次の3期に分けることができる¹⁵⁾。

(1) 第1期 ペスタロッチーに出会うまで（1887年～1919年）

第1期は、長田が広島高等師範学校に就職するまでの時期である。長田は長野県に生まれ幼少時においては生誕地である長野県の気風や教師であった母親からの影響を受けた。その後、諏訪中学校を経て広島高等師範学校に進学し、小西重直から薫陶を受けた。その後長田は大分県師範で教師生活を送るが、このときのことについて「自己の天職を発見したという感激に満ちた」、「教育という仕事の性質を探究することの興味を漸く深く感じ始めた」¹⁶⁾と印象的に述べている。その後長田は京都帝国大学に進学し、研究生生活を送る。ここで長田は、再び小西重直から薫陶を受けるとともに、澤柳政太郎から大きな影響を受ける。ここで、教育学研究への志と研究者としての素地が形成されたといえる。京都帝国大学卒業後、長田は澤柳の秘書をするとともに、澤柳が1917年に創設した成城小学校の創設・経営に参画し、実践研究を行った¹⁷⁾。このように長田が広島高等師範学校に就職するまでの時期は、直接的にペスタロッチーを研究したわけではないが、教育学研究や教育実践への関心など、後にペスタロッチー研究へと進む素地が作られた時期であるといえるだろう。

(2) 第2期 ペスタロッチー運動を展開した時期（1920年～1944年）

次に第2期であるが、これは広島高等師範学校なら

びに広島文理科大学において長田が精力的にペスタロッチー研究と運動を広めた時期である。長田は1921年8月から約1年間、欧米各国の教育政策・教育事情の視察に出かける¹⁸⁾。この欧米視察で長田はドイツに最も長く滞在し、シュプラランガー (Ed. Spranger)、リット (Th. Litt)、ナトルプ、ケルシェンシュタイナー (G. Kerschensteiner) と会った。

1920年代後半の長田の身边は激動の波に洗われる。1927年は、ペスタロッチー没後100年にあたり、日本でも各地で記念祭が執り行われた¹⁹⁾。ペスタロッチー祭が盛大に営まれ、長田も記念出版をしており、ペスタロッチー研究が順調に発展すると思われたその一方で、12月、澤柳政太郎が猩紅熱で急逝する。『平和を求めて 一長田新 論文・追想記』によると、このころから帝国教育会が急激に反動化していく²⁰⁾。1928年6月29日には「治安維持法」が出された。こうした状況の中で、長田は1928年3月から約1年半、ドイツに留学する。このときはリットについて教育哲学を研究し、スイスにも2度訪れ、ペスタロッチー研究所やペスタロッチーの遺跡を調査した。

1929年4月1日に広島文理科大学が開設され、長田は教育哲学・教育史の研究と指導にあたった。ここから1939年までが長田のペスタロッチー研究ならびに教育学研究が飛躍的に進んだ時期といえる。1933年に京都帝国大学より「ペスタロッチー研究」で学位取得、『教育学』（1933年）、『ペスタロッチー教育学』（1934年）、『教育活動の本質』（1936年）、『近世西洋教育史』（1936年）、『最近の教育哲学』（1938年）と主要著作を次々と公刊した。また発表した論文数も、大小合わせると100本以上にのぼる²¹⁾。この時期に長田はペスタロッチー研究とともに自分自身の教育学理論を形成していったと推測される。そして1941年、長年にわたるペスタロッチー研究・運動に対し、スイス政府からペスタロッチー賞が授与され、スイス国立ペスタロッチー研究所の在外研究員に任命された。

以上のように、ペスタロッチー研究ならびに教育学研究が飛躍的に発展し、長田が自分自身の教育学を形成していったのが、第2期だったと考えられる。

(3) 第3期 ペスタロッチー研究とともに教育学研究、平和運動を展開した時期（1945年～1961年）

第3期は、第2次世界大戦、自分自身の被爆体験などを乗り越えて、ペスタロッチー研究とともに教育学研究、平和教育・運動を展開した時期である。被爆による体調等を考えれば、大変な著作期であるといえる。主要なものだけでも、『ペスタロッチー伝』（1951-52年）、『ペスタロッチー全集』の監訳（平凡

社, 1959-60年), 『道徳教育の根本問題』(1958年), 『教育哲学』(1959年)等があげられる²²⁾。また1960年にはチューリヒ大学名誉哲学博士の称号を授与されている。平和運動としても『原爆の子』(1951年)の出版, 「日本子どもを守る会」会長就任(1952年)など, 幅広くおこなっている。ペスタロッチー研究や教育学研究から学んだ理論を基に形成した長田独自の理論と, それにもとづく平和教育・運動を展開した時期ととらえることができるだろう。

以上のように大別した場合, 長田がペスタロッチーから影響を受けながら自分自身の理論を形成したのは, 第2期にあたりと考えられる。次に, 第2期における主要著作である『ペスタロッチーの教育思想』と『ペスタロッチー教育学』を中心に, 理論形成のプロセスを見ていくことにする。

2. 1920年代における長田のペスタロッチー理解 — 『ペスタロッチーの教育思想』から —

(1) ナトルプからペスタロッチーへ

まず, 長田の1920年代以前の主張であるが, 早くも「産業革命と現今の教育問題」(「帝国教育」1919年)において, 長田は教育学を産業革命以降の社会状況との関連においてとらえる必要性を指摘している。萌芽的ではあるが, 晩年の著作『教育哲学』の中で述べた社会科学としての教育学の提案, つまり政治・経済との関連において教育をとらえようとする長田独自の考え方の原点をみることができ²³⁾。

ペスタロッチーとの関連にしばっていくなら, 長田は1921年2月に管見の限りではペスタロッチーの名を冠した初めての論文である, 「ペスタロッチの「教育即生活」の意味」(『学校教育』第92号, 1921年)を公表している。この中で長田は, ペスタロッチーの認識論は, 理想主義の上に立っていること, そこにルソー(J.-J. Rousseau, 1712-1778)からの超越があり, それゆえ「自己活動」「自己創造」が中心原理となっていると述べている。この後, 1924年2月から1926年2月まで, ナトルプの理想主義についての8本の論文を公表し, 1925年には『ナトルプに於けるペスタロッチの新生』を公刊している²⁴⁾。長田はナトルプを研究しながらも, ナトルプらの理想主義哲学は, ペスタロッチーの教育学の根本理念である「自発性」の原理に基礎をおいていること, 社会的教育学はペスタロッチーの社会的立場を発展させ基礎づけしたものと見えるとし, ペスタロッチー研究によってナトルプを超える視点が見つかるであろうことを示唆して

いる。

次に, 長田によるペスタロッチーに関する最初の研究書である『ペスタロッチーの教育思想』からこの当時の長田のペスタロッチー理解について検討する。

(2) 『ペスタロッチーの教育思想』に見るペスタロッチー理解

ペスタロッチー没後100年を記念して出版された『ペスタロッチーの教育思想』の中で長田は, この書の執筆目的として以下の2点をあげている。まず第1に, それまでの哲学思想の枠組みでは説明できないペスタロッチー独自の思考の枠組みを示すことである。長田によれば, 「魂や愛や心臓を以て直観し体験した彼(ペスタロッチー:注・鈴木)の思想は真に『聖なる暗』であった」²⁵⁾。「聖なる暗」と長田が表現していることの内容は, 従来の研究の枠組みからみれば科学的でも学問的でもない内容であるが, 教育学にとっては本質的なことを指している。まだその解明が不十分であると考えた長田は, この時点では「『聖なる暗』と呼び, これを解明することを本書の目的のひとつとしてあげている。

第2に, 長田は「聖なる暗」の中に秘められている「高き理念の光と深き叡智の閃き」²⁶⁾を解明することが自己の課題であるとしている。長田は, 「『聖なる暗』のうちにその理念と叡智とを捕えることは, 私に取って決して容易の業ではない」²⁷⁾と述べつつも, その解明は本書のもうひとつの目的であるとしている。当時の長田が「独立した科学としての教育学」への関心を示していることから考えると, ペスタロッチーの教育思想の研究によって, 教育学の基礎づけをしようと考えていたのではないかと推察される。

以上の問題関心に対して長田がどのように応えているかという点, 長田はこの書の中で, ペスタロッチー教育学の特徴として, 「経験」と「哲学」を統一した教育学的方法²⁸⁾, 感覚と精神との一元的統一という「合自然性の原理」²⁹⁾, 理念と感性とを統一した「直観論」³⁰⁾をあげ, それらを教育学独自の方法として示そうとしている。以上のことから, 1920年代に社会的教育学の立場からナトルプの研究に取り組んだ長田は, ナトルプの理想主義哲学にもとづく教育学の根底にあるペスタロッチー教育学へと研究を進め, その結果, 教育学的方法としての「経験」と「哲学」の統一, 教育原理としての「合自然性の原理」, 教育方法論としての「直観」をペスタロッチー教育学から学び取ったといえるだろう。これが長田教育学の基本的枠組みとなったと思われる。

1929年4月1日に広島文理科大学が開設され, 長

田は教育哲学・教育史の研究と指導にあたることになった。前述したように、ここから1939年までが長田の研究が飛躍的に進んだ時期といえる。それを示す重要な著作が、学位論文である『ペスタロッチー教育学』である。

3. 1930年代前半における長田のペスタロッチー理解—『ペスタロッチー教育学』から—

長田が京都帝国大学に提出した学位論文である『ペスタロッチー教育学』は、今なおペスタロッチー研究の最高水準の内容をもつ研究書といえるだろう。この書の中で長田は、ペスタロッチー研究者としての立場や研究の視点について章を割いて述べている。以下、長田の見解に従いながら、ペスタロッチー理解の深まりを見ていくことにする。

(1) 『ペスタロッチー教育学』に見られる長田のペスタロッチー研究の目的

『ペスタロッチー教育学』に述べられているペスタロッチー研究の目的は大別すると次の4点である。まず第1に、『ペスタロッチーの教育思想』にも見られた「独立の科学としての教育学」への関心である。長田によれば、「世人はペスタロッチーの生涯と性格との対して余りに感傷的な讃美の声を発するに忙しくして、あの実り豊かな永劫不朽の思想を深く研究味得することを忘れ勝ちである」³¹⁾。ここに述べられている「実り豊かな永劫不朽の思想」というのは、『ペスタロッチーの教育思想』で「聖なる暗」と述べていた内容と一致するといえよう。

第2に、「実践学としての教育学」への関心があげられる。長田によれば、「教育学はもともと実践学であるからその内容の実地に切実ならざるものは教育学とは言うを得ない。然るにペスタロッチーの教育学はそれが飽きも実践学であるとの意味において人類の有り得る一個の最も典型的な教育学であると私は思う」³²⁾。「実践学としての教育学」への関心は、長田の大分師範時代、澤柳との成城小学校での実践を通じて培われたものでもある。

第3に、教育改革への視点である。長田によれば、「言うまでもなく私たちの教育研究は彼の年老いた閑人がチューリップや菊を作るとは違って、今や嵐の真直中に立つ祖国と魂の失せた同胞と危機に直面せる教育界とに働き掛けて其処に新生命を蘇らせる企図である。そうしてそれが恰もペスタロッチーの教うところではないであろうか」³³⁾。長田は教育学研究は現実

の問題解決のためにあると考えており、当時の日本の教育の現状はペスタロッチーの時代と大差なく映ったため、ペスタロッチー教育学に解決の方途を求めたと述べている³⁴⁾。

第4に、児童期への着目があげられる。長田によれば、「真の魂の教育は我々各自の児童期においてのみ企図される。知識技能の伝授は長じて後にもできるであろうが、真の内面の力の教化はこれを幼き日において企図する外はないと思う。ペスタロッチーは既に早く此の理を解して児童を対象とする『基礎教育の理念』の探究に生涯を捧げている」³⁵⁾。澤柳の影響や成城小学校での経験もあって、児童期の教育に関心をもっていたことがペスタロッチー研究へと向かわせたと考えられる。

以上から考えると、長田は児童期を対象としたことから子どもからの視点に立ち、小学校教育の改革のために、理論的側面と実践的側面とからペスタロッチー教育学の解明をめざしたと考えられる。

(2) 『ペスタロッチー教育学』に見られる長田のペスタロッチー研究の立場

長田は、自分の研究的立場として以下の点をあげ、それまでのペスタロッチー研究との相違を示している。長田はそれまでのペスタロッチー研究の成果について、まず第1に、教授法にのみ注目した一面的な研究であったという点で批判している³⁶⁾。長田はこうした傾向に対して、全体的な視点が欠けているという点で批判している³⁷⁾。そして、長田のペスタロッチー研究の視点として、ペスタロッチーの「思想における社会的、政治的、経済的、教育的、宗教的、哲学的の種々相を全体として包括的に見ること」³⁸⁾をあげている。

第2に、長田は時代精神を考慮する必要性を指摘している。長田は「ペスタロッチーも亦時代の所産である」³⁹⁾ことを指摘し、「従来のペスタロッチー学徒が総じてペスタロッチーの獨異性を讃美しようとする熱意の余り、彼を時代の外に立つ一個の超越的な存在として取扱い過ぎている」⁴⁰⁾と批判している。そしてペスタロッチーの思想を「時代との関係、然り極めて密接なる時代との関係において」⁴¹⁾検討するのが、長田の研究的立場であると述べている。

第3に、ペスタロッチーが従来の哲学の枠組みに入らない「体験の教育学」に基づいていることを理解する必要があるという点である。長田によれば、「体験と思想とは彼（ペスタロッチー：注・鈴木）にあつては分離し難き渾一体をなしている」⁴²⁾。ペスタロッチーの教育思想は「感情の論理」に支配されており、それは悟性の論理に比べて永劫普遍なものをよりよく

把握するのではあるが、体系づけるのは甚だ困難であると長田は述べている⁴³⁾。しかしここを中心点としてペスタロッチーの教育思想を解明することがペスタロッチー研究の重要な課題であることを指摘している⁴⁴⁾。

この点について長田はさらに、ペスタロッチーは非専門的であるがゆえに自由な立場で物を見ることができ、それゆえ普遍的な本質的な教育原理をとらえることができたとしている⁴⁵⁾。そう考えたとき、「プラトン学徒でもあればカント学徒でもあるナトルプのペスタロッチー観は果してペスタロッチーの真意を語り得るだろうか」⁴⁶⁾との疑問から、長田は自己的研究的立場として、「寧ろ新カント哲学との歴史的関係において、同時に併しこの新カント哲学との一種対立の形において発展して来た生命哲学・精神科学的心理学・全体性的心理学・イェンシュが謂うアイデティーク (Eidetik)・現象学・若しくは哲学的人間学の如き光に照らすことに依ってよりよくペスタロッチーが思想の真意を把握し得るのではないであろうか」⁴⁷⁾と指摘している。

以上のような研究的立場から『ペスタロッチー教育学』は執筆され、それぞれの章において長田の研究的立場が特徴づけられる論展開をおこなっている。なかでも注目したいのは、第2章「ペスタロッチー教育学の方法」と第3章「社会改革家ペスタロッチー」である。第2章において長田は、ペスタロッチーは哲学的演繹でも自然科学的演繹でもない、自分自身の体験から直接本質を把握する態度で教育活動の本質をつかもうとしたと述べ⁴⁸⁾、このように特殊な具体的事実の中に、本質的なもの、一般的なものをとらえようとするのが、ペスタロッチーの教育学的思惟の特徴であると述べている⁴⁹⁾。これはカント哲学との相違としても、とりあげられている⁵⁰⁾。このことは長田が独自の研究的立場として示した「全体的理解」や「体験」や「感情の論理」からのペスタロッチー理解を示しているといえる。

第3章において長田は社会改革家、初等教育改革家としてのペスタロッチー理解を示している。ペスタロッチーの時代が資本主義が勃興し階級闘争が激化した時代であることを指摘し、この救済のために民衆教育の組織化が必要であると考えたところに社会改革家としてのペスタロッチーの立場を見ている⁵¹⁾。長田は『立法と嬰兒殺し』をひきあいに出しながら、「犯罪防止の方法は人間愛に基づく民心の純化でなくてはならない」⁵²⁾とし、立法が特定の犯罪防止ではなく、一般的な悪徳の防止に主眼をおくのであれば、必然的に家庭教育へと向かわざるをえないと指摘している⁵³⁾。ここに時代との関連においてペスタロッチーを理解しよ

うとする長田の立場が示されているといえよう。

5. 長田教育学の形成への ペスタロッチー教育学の影響

最後に『ペスタロッチー教育学』にみられるペスタロッチー理解と、長田教育学の形成との関連について検討することにする。ここで長田の研究史的内容をもつ論文である、「余の教育学をめぐりて」(『教育』第3巻第1号、1935年)を参考にしながら、整理していきたいと考える。

「余の教育学をめぐりて」において、長田は、自分がペスタロッチーに強く引きつけられた要因として、第1に、「東京時代以来懐いていた小学教育に対する強い関心」⁵⁴⁾であり、第2に、「実践学としての教育学はまた経世学であり、社会改革学であり、救世済民学である」⁵⁵⁾という長田の教育学理解から見たとき、ペスタロッチーがこうした理解を示した教育史上最初の人物だったという点をあげている。ここでとりわけ、「社会改革」や「救世済民」といった社会と教育との関係を長田が指摘している点に注目したい。長田はこの論文の中で、小西重直と澤柳政太郎の影響に言及し、教育本質観は小西重直から、教育事実の重視は澤柳から学んだとして、このふたりの影響を認めている⁵⁶⁾。とくに第1点である「小学教育に対する強い関心」には、澤柳の影響がかなり強いと考えられる⁵⁷⁾。このことから、長田がペスタロッチー教育学から影響を受けたのは、第2点である教育学の理論構成そのものではないかと考えられる。

とりわけ、長田が1919年においてすでに社会的関心を強く持ち、社会・国家と教育との関連性に言及していたことに注目したい。社会と教育との関連への着目は、長田をナトルプの「社会的教育学」へ、さらにペスタロッチーへと向かわせたのではないか。そこでペスタロッチーが、「合自然性」「直観」といった原理を用いて、個人から社会へという枠組みを示していたことが長田教育学の理論構成に影響を与えたのではないかとと思われるのである。

長田は、『ペスタロッチー教育学』において法律と教育との関係を検討し、国の基本は法律ではなく教育にあることを導き出している。これは長田の「教育立国論」につながる考え方である⁵⁸⁾。長田は「産業革命と現今の教育問題」においては、教育の意義は、一般大衆を対象として産業革命後の社会に適應させることにあると述べ⁵⁹⁾、社会状況に立脚した教育が必要であると指摘しているし、「近世に於ける個人主義の発展」(『帝国教育』第455号、1920年)においても「国

家の機能を個人の完成にあるとみる国家思想は個人主義そのものである⁶⁰⁾とし、そこから近世個人主義が生まれたと述べているが、国家の機能と教育との関連は十分解明されてはいない。これに人間の教育の立場から回答を与えたのがペスタロッチーであり、そこから社会の根本を教育において考える長田独自の教育学理論としての「教育立国論」が形成されたのではないかと考えられる。これが長田教育学の形成に与えたペスタロッチー教育学の影響の1点である。

これに関連して、第2点として、実践学としての教育学という視点から、長田が教育活動の本質解明に注目していた点をあげたい。長田は教育活動の本質解明をひとつの目的としているが、これは具体的にいえば哲学あるいは世界観と教育実践とを一元的に把握することでもある。このための方法論の構成にペスタロッチー教育学が影響を与えているという点である。ここで長田が、教育学研究に独特な方法論として「本質直観」をあげていることに注目したい。「本質直観」という言葉は、『ペスタロッチー教育学』でも用いられているが⁶¹⁾、長田はこれについて従来の科学の演繹的方法と帰納的方法のいずれでもない教育学的方法だと述べ、他の学問とは異なる教育学独特の方法論であると主張している⁶²⁾。これをペスタロッチーから学び、教育学独自の方法論として構成しようとしたのではないかと考えられる。

長田は、「教育学は学たる為に一旦哲学の門に入るべきであるが、併し哲学に留つてはならない」⁶³⁾と述べ、従来の哲学とは異なる枠組みでの「独立した科学としての教育学」の基礎づけへの関心を示している。このための方法論として示したのが、「本質直観」だと考えられる。そして「本質直観」の方法論として、静的な方法として現象学的方法を、動的な方法として弁証法をとりあげている⁶⁴⁾。教育学に独自の方法であるはずの「本質直観」に学問的性格を与えるために現象学、弁証法といった、哲学的方法論をいれざるをえなかったところに、教育学の学問としての自立性の弱さが伺えるが、これが1930年代前半ごろまでの長田の教育学的立場だったのではないかと思われる。

この立場が『教育哲学』(1959年)まで継承されているのかどうかは重要な問題であるが、こうした学問的立場の継承性についての問題⁶⁵⁾は、長田の1930年代後半から1940年代前半にかけての教育学理論の詳細な検討を待たなければならないと思われる⁶⁶⁾。この点については今後の課題としたい。

【注】

- 1) 本論では船山謙次や矢川徳光にしたがって、長田新の教育学理論を、「長田教育学」とよぶことにする。船山謙次「長田教育学」の発展(『平和を求めて—長田新 論文・追想記—』広島大学新聞会, 1962年, pp.190-194), 矢川徳光「長田教育学」の本質(『平和を求めて—長田新 論文・追想記—』, pp.281-292), 船山謙次「長田教育学に学ぶ」(『信州白樺 長田新特集』第61・62・63号合併号, 1985年)等参照。
- 2) 長田教育学は、彼の主著を中心として考えるなら、1933年、長田が46歳のときに公刊した『教育学』から、晩年である1959年、長田が72歳のときに公刊した『教育哲学』にいたるまで、第2次世界大戦、自身の被爆体験、戦後の日本の歩みなどを経験しながら、発展し続けていると考えられる。その意味では、本論でとりあげる1920年代から1930年代にかけての時期はその最初の部分にすぎないといえる。そこで、本論では「長田教育学の形成」とすることにした。これは「形成過程」という意味であって、1930年代で長田教育学が成立したといえるかどうかもまだ不確定であると考えて、「形成」とした。
- 3) 長田五郎「長田新の平和教育論(1)~(6)」(明星大学戦後教育史研究センター『戦後教育史研究紀要』第12号~17号, 1998~2003年), 参照。
- 4) 中野光「ペスタロッチーを学んだ2人の教育学者—澤柳政太郎・長田新におけるペスタロッチーとの出会いと継承—」(日本ペスタロッチー・フレーベル学会紀要『人間教育の探究』第16号, 2004年), 参照。
- 5) 高橋智「長田新の教育学説史研究—戦後教育論の展開と構造に関するノート—」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第3号, 1984年)参照。
- 6) 長浜功『教育の戦争責任』大原新生社, 1979年, pp.112-120, 参照。
- 7) 木村元「自由教育派の教育学と国民学校論—長田新の教育学における「教授」と「錬成」—」(教育史学会紀要「日本の教育史学」第33集, 1990年)参照。
- 8) 近藤真庸・村井淳志「大正期における長田新の教育内容改革論」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第3号, 1984年)参照。
- 9) 草野滋之「戦前における長田新の教育学理論の特質に関する一考察」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第3号, 1984年)参照。
- 10) 前掲の論文の他、『平和を求めて—長田新論文・追想記—』(広島大学新聞会, 1962年)ならびに『信州白樺 長田新特集第61・62・63号合併号』

(1985年)等に多くの長田新に関する論文が取められている。本論ではとりわけ、東京都立大学大学院山住ゼミ・長田新文献目録作成委員会編による「長田新文献目録」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第3号, 1984年)から多くの示唆を受けた。

- 11) 1945年までの長田の著書・論文は、大別してペスタロッチーに関するもの、西洋教育史、教育哲学など教育学理論に関するものに分けられる。1945年以降はこれに平和教育に関するものが加わっている(東京都立大学大学院山住ゼミ・長田新文献目録作成委員会編「長田新文献目録」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第3号, 1984年, 参照)。
- 12) 「長田新氏教育学」(『日本現代教育学大系 第7巻』1927年, モナス), pp.112-120, 参照。なお本論においては、長田の著書・論文からの引用についてはできるだけ現代仮名遣いに改めたことを断っておく。
- 13) 長田新『ペスタロッチーの教育思想』岩波書店, 1927年。
- 14) 長田新『ペスタロッチー教育学』岩波書店, 1934年。
- 15) 以下、『平和を求めて—長田新 論文・追想記—』(広島大学新聞会, 1962年), pp. 333-361を参照。
- 16) 長田新「余の教育学をめぐりて」(『教育』第3巻第1号, 1935年), p.285。
- 17) 澤柳政太郎他『児童語彙の研究』(同文館, 1919年)等があげられる。
- 18) 小西重直・長田新編『現代欧米教育大観』(同文館, 1924年), 参照。
- 19) 寺岡聖豪「昭和2(1927)年のペスタロッチ記念祭」(日本ペスタロッチー・フレール学会第22回大会シンポジウム, 2004年9月12日, 配付資料), 参照。
- 20) 『平和を求めて—長田新論文・追想記—』 p.343。
- 21) 長田の著書・論文については、東京都立大学大学院山住ゼミ・長田新文献目録作成委員会編「長田新文献目録」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第3号, 1984年)参照。
- 22) 東京都立大学大学院山住ゼミ・長田新文献目録作成委員会編「長田新文献目録」(東京都立大学教育学研究室『教育科学研究』第3号, 1984年)参照。
- 23) 長田新『教育哲学』(岩波書店, 1959年) p.9, 参照。この点について、長田と石山脩平との間で「社会科学論争」が展開された。長田新「現代ドイツ教育学の課題—危機と教育」(『教育学研究』第

23巻第6号, 1956年), 長田新「教育学の基礎としての社会科学」(『教育学研究』第24巻第5号, 1957年), 長田新「社会科学とヒューマニズム」(『教育学研究』第24巻第6号, 1957年), 石山脩平「社会科学と教育哲学—シュプランガー批判をめぐって長田新氏の教示を乞う」(『教育学研究』第24巻第1号, 1957年)参照。船山謙次『戦後日本教育論争史』(東洋館出版, 1958年)に詳しく述べられている。社会思想史の立場からの批判として、水田洋・水田珠枝「近代の教育思想と社会思想 —岩波講座「現代教育学・4・近代の教育思想」批判—」(『教育』国土社, 1961年, pp.96-101)は示唆的である。

- 24) 「ペスタロッチと理想主義の哲学1)2)3)4)」(『学校教育』第127, 128, 129, 133号, 1924年2, 3, 4, 7月), 「パウル・ナトルプ「ペスタロッチの理想主義」5)6)7)」(『学校教育』第138, 139, 140号, 1924年12月, 1925年1, 2月), 「ペスタロッチと理想主義の教育学」(『学校教育』第152号, 1926年6月)参照。『ナトルプに於けるペスタロッチの新生』(イデア書院, 1925年), 参照。
- 25) 長田新『ペスタロッチーの教育思想』, pp.7-8。
- 26) 同前書, pp.8-9。
- 27) 同前書, pp.8-9。
- 28) 同前書, pp.21-22。
- 29) 同前書, pp.60-66。
- 30) 同前書, pp.105-107。
- 31) 『ペスタロッチー教育学』, p.1。
- 32) 同前書, pp.1-2。
- 33) 同前書, p.2。
- 34) 長田新「余の教育学をめぐりて」(『教育』第3巻第1号, 1935年), p.289。
- 35) また『ペスタロッチー教育学』の中ではこれら以外にスイスと日本との類似性についてとりあげられている(pp.2-3)。
- 36) 長田は「甚しきは彼(ペスタロッチー:注・鈴木)を以て単なる教授法の一改革家としてさえ見ようとする傾向」があったと述べている。長田によれば、明治10年代に日本に移入されたペスタロッチーの思想は、伊沢修二、高嶺秀夫を中心として移入され全国に公布された、いわゆる「開発教授」だった(以上、『ペスタロッチー教育学』, p.5, 参照)。
- 37) 『ペスタロッチー教育学』, p.6。
- 38) 同前書, p.6。
- 39) 同前書, p.8。
- 40) 同前書, p.6。
- 41) 同前書, p.11。

- 42) 同前書, p.14。
- 43) 同前書, pp.14-15。
- 44) 同前書, p.15。
- 45) 同前書, pp.16-17。
- 46) 同前書, p.20。
- 47) 同前書, pp.20-21。
- 48) 同前書, p.50。
- 49) 同前書, p.52。
- 50) 同前書, pp.273-303。
- 51) 同前書, p.67。
- 52) 同前書, p.84。
- 53) 同前書, p.92。
- 54) 長田新「余の教育学をめぐりて」, p.291。
- 55) 同前書, p.292。
- 56) 同前書, p.286。
- 57) 同上。
- 58) 長田新「教育立国—小学教育の使命と本質—」(『公民教育』第6巻第8号, 1936年), 参照。長田の教育立国論については, 三木良明「長田教育学の現代的意義—教育立国論を中心として—」(広島大学大学院教育学研究科教育学専攻課題研究報告書), 参照。
- 59) 「産業革命と現今の教育問題」(『帝国教育』1919年), p.9。
- 60) 「近世に於ける個人主義の発展」(『帝国教育』第455号, 1920年), p.19。
- 61) 『ペスタロッチー教育学』, pp.49-54。
- 62) 「伏見猛弥君「長田新博士の教育学」を讀みて」(『教育』第4巻第4号, 1936年), pp.171-173。これは伏見猛弥「長田新博士の教育学」(『教育』第4巻第1号, 1936年)への反論として書かれたも

のである。

- 63) 長田新「余の教育学をめぐりて」, p.288。
- 64) 長田新「児童生命の理解」(『学校教育』第243号, 1933年), 参照。
- 65) たとえば, 森徳治はこの点について, 晩年における長田の社会運動への転換は, 思想上の単なる転換ではなく発展的転換だったのではないかと指摘している(森徳治「偉大なる生涯」『平和を求めて—長田新 論文・追想記—』, pp.292-302)。また, 船山謙次は, ドイツ観念論哲学者であり教育学者であった長田が, 晩年教育学に政治学と経済学とが果たす役割を主張したことは一種の驚きでありわが意を得たものでもあり, 敬服にたえなかった, と述べている(船山謙次「長田教育学に学ぶ」『信州白樺』pp.340-371)。この点の検討は重要な課題であると考ええる。
- 66) この点に関しては, 日本ペスタロッチー・フレーベル学会第22回大会シンポジウムにおいて中野光氏より重要な指摘をいただいた。

追記: 本論は日本ペスタロッチー・フレーベル学会課題研究委員会(2003年11月9日)ならびに日本ペスタロッチー・フレーベル学会第22回大会シンポジウム(2004年9月12日)において口頭発表した内容に加筆修正したものです。本論の作成にあたっては, 長田五郎先生, 中野光先生, 藤井敏彦先生, 浜田栄夫先生, 鳥光美緒子先生をはじめ, 多くの先生方のご助言・ご示唆をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。また長田新に関する資料収集にあたっては, 教育学部4回生の藤橋智子さんに献身的なご協力をいただきました。心から感謝申し上げます。